リズムダンスにおける動きへの気付きの分析

－児童によって観察された体幹部の動きに焦点をあてて－

河合　彩華[1]，大後戸一樹[2]，湯浅　理枝[3]，高田　康史[4]

要約

本研究では，体育科の教材であるリズムダンスの授業において，リズムにのるために重要と考えられる体幹部の動きを，児童はどのように観察できるのかを授業実践を通して検証することを目的とした。授業では，体幹部の動きに気付きやすくするための提示用資料を使用した。その資料を児童に観察させ，ワークシートに「体幹部が強調されていない動き」と「体幹部が強調されている動き」の違いを記述させた。児童のワークシートの記述内容は，すべてテキストデータに整理し，帰納的分類を用いて分析を行った。その結果，「体の部位」「リズム」「動きとリズムの関係」「踊っている印象」の4つのカテゴリーに分類された。その中でも「体の部位」に関する記述が最も多く，特に背中に関する記述が最も多かった。また，児童は比喩を使った表現，オノマトペを使った表現を使用していた。

キーワード：リズムダンス，映像，記述，小学校児童

1. はじめに

『小学校学習指導要領　第9節　体育』（文部科学省，2008）における内容領域の1つである表現運動系は，低学年を「表現リズム遊び」，中学年・高学年を「表現運動」で構成されている。「表現運動」では，さらに中学年で「表現」と「リズムダンス」，高学年で「表現」と「フォークダンス」に区分されている。中学年で「リズムダンス」，高学年で「フォークダンス」と定められているが，高学年では，地域や学校の実態に応じて「リズムダンス」を加えて指導することができるように示された。本研究では，中学年・高学年における内容である「リズムダンス」を考察の対象とする。

『小学校学習指導要領　第9節　体育』（文部科学省，2008）によると，リズムダンスは「軽快なリズムに乗って全身で踊る」[1)]ことが求められている。『小学校学習指導要領解説　体育編』(文部科学省，2008）では，リズムダンスの動きに関して，以下のように例示している。[2)]

ロックの弾みや後打ち（後拍が強調された弱起のリズムでアフタービートともいう），サンバの「ウンタッタ」のシンコペーション（拍子の強弱を逆転させたり変化させたりしたリズム）のリズムの特

[1] 広島大学大学院教育学研究科博士課程前期　院生

[2] 広島大学大学院教育学研究科

[3] 広島大学附属三原小学校

[1] 環太平洋大学

徴をとらえ，体の各部分でリズムをとったり，体幹部（おへそ）を中心にリズムに乗ったりして全身で踊ること。

現行の小学校学習指導要領の作成を担当した村田（2002）は，リズムダンスで使われる曲は「体幹部（おへそ）でとるリズムが特徴である」[3] と述べる。そして，その曲調ごとの動きのポイントとして，ロックのリズムでは「リズムに同調して全身で（体幹部で）リズムをとらえて」[4]，サンバのリズムでは,「腰（ヘソ）の前後揺れ」[5] ヒップホップのリズムでは,「強いビートを体幹部でとらえて」[6] などを挙げた。これは，村田がどのようなリズムダンスにおいても体幹部を意識して踊ることを求めていると考えられる。また，原田（2011）は「普通に足踏みするだけでは踊った感じがしないが，骨盤の動きを伴うアップとダウンをすると踊った感じが味わえる」[7] と，小学校学習指導要領のいう「体幹部（おへそ）を中心に」動くことについて示唆していると考えられる。つまり，小学校学習指導要領が重視している体幹部の動きは，リズムダンスにとって不可欠な動きだといえよう。現行の小学校学習指導要領では，リズムにのるために体幹部の動きを重視し，それを児童が身につけるための実践的研究が必要であろう。

しかし，先行研究によると，リズムの特徴をとらえて，リズムにのって踊ることが困難である（土井・川口，2007）ことや,「自己課題を設定しにくく，学びの深まりが得られにくい」[8]（古川，2011）など，児童がリズムにのっている動きとはなにか理解できてない状況があることが報告されている。また，リズムにのるために必要と考えられる体幹部の動きについて，「体幹部（おへそ）を中心に」[9] 踊るという技能の評価の視点を示した研究や，その有効性を検証した研究は管見の限り見られない。

そこで，本研究では，児童が「体幹部（おへそ）」の動きを，どのように観察できるのかについて検証することを目的とした。なお，以下「体幹部（おへそ）」を体幹部とのみ記す。

2. 研究方法

2.1. 対象

平成 26 年 2 月に，広島県内 M 小学校 5 年生 1 クラス（男子 20 名，女子 19 名，計 39 名）を対象に調査を行った。対象学級は，これまでリズムダンスの単元を 2 回行っている。

1 回目の単元は 4 年次の平成 25 年 2 月に実施し，全 8 時間のうち最初の 4 時間は，ゲストティーチャー（広島県内の中学校で非常勤講師としてダンス指導をしている男性教員）の指導によって，ヒップホップの 8 つのステップ（ダウン・ボックス・スライド・ラコステ・ボップコーン・バックランニングマン・スマーフ・サイドステップ）を学習した。単元の最後ではグループでステップを組み合わせて作品を作った。

2 回目の単元は 5 年次の平成 25 年 7 月に実施した。そこでは，1 回目とは違う曲を用いて，グループでステップを組み合わせて作品を作った。

なお，今回の授業の指導を行ったのは，教職歴 6 年目で，ダンスを指導した経験は 2 年目である女性教諭であった。ダンス指導は本調査の対象学級で行っており，今まで行ったリズムダンスの 2 回の単元を指導していた。

2.2　資料の収集

授業では，体幹部の動きを児童に気付かせるための提示用資料を作成した。取り上げたステップは，リズムダンスの基礎的なステップであるダウンのステップである。このダウンについて，一方は体幹部の動きが強調されていない動き（以下，「体幹部が強調されていない動き」とする），もう一方は体幹部の動きが強調されている動き（以下，「体幹部が強調されている動き」とする）を同時に連続再生する提示用資料を作成した。授業では，この提示用資料をプロジェクターに投影し，児童に観察させ，2つの動きの違いについて全体で意見交流を行った。本調査を行った授業の流れが表1である。提示用資料の観察と意見交流を約20分行った。その後，図1にあるワークシートを配布し，2つの動きについての記述をさせた。記述の際には，「2つの動きをくらべましょう」と指示し，言葉だけでなく絵や図などを使って説明することも許可した。授業後にワークシートを回収した。39名の回答が収集できた。

表1　本調査を行った授業の流れ

主な学習活動	教師の働きかけ
1. 準備運動。	
2. 8つのステップの復習をする。	・ステップを覚えているか，動きを確認する。
3. 今後の単元の流れを説明。	
4. 提示用資料の観察をする。	・2つの動きの違いは何かを考えさせる。
・全体で意見を交流する。	・どちらの動きがよい動きかは述べず，2つの動きの違いを発表させた。
・2つの動きを自分たちで表わしてみる。	
5. ワークシートを記述する。	・ワークシートを使用した。

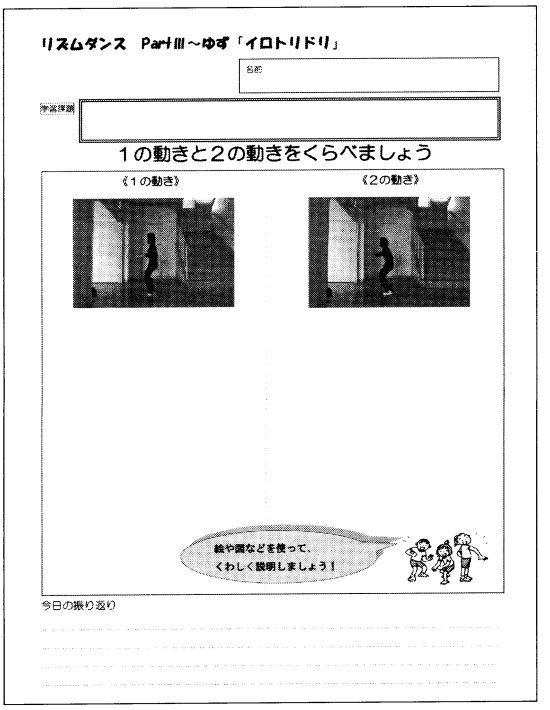

図1　提示用資料観察後に記述させたワークシート

2.3　資料の分析方法

ワークシートの記述内容は，すべてテキストデータに整理し，まず，最初に分析者1名が帰納的に分類した。その後，授業を行った教師1名と授業を観察した大学教員1名をあわせ，3名で分類の妥当性の検証を行った。なお，児童の記述で，「体幹部が強調されていない動き」と「体幹部が強調されている動き」の記述内容が対になっていたものは，どちらか一方を除外した。例えば，「体幹部が強調されていない動き」を「せすじがまがっていない」と記述し，「体幹部が強調されている動き」を「せすじがまがっている」というように2つの記述があった場合，「せすじがまがっているかどうか」に着目していると判断し，一方を除外した。また，主語がない「深い」「2よりまがっていない」など，どのカテゴリーに該当するかわからない記述は除外した。最後に，分類することのできた記述について，カテゴリーごとにカウントした。

3. 結果及び考察

3.1. 提示用資料の観察によるよい動きの判断

意見交流の最後に，教師から「体幹部が強調されていない動きと体幹部が強調されている動きのどちらがよいか」と質問した。「体幹部が強調されていない動き」の方がよい動きであると挙手をする児童はいなかった。「体幹部が強調されている動き」の方がよい動きであると挙手をした児童は34名であった。約87パーセントの児童が「体幹部が強調されている動き」をよい動きであると認識していると考えられる。

意見交流の際，「体幹部が強調されていない動き」についての意見に比べ，「体幹部が強調されている動き」についての意見が多かった。また，「体幹部が強調されている動き」について，「深い」「激しい」「(ひざが) いっぱい折れている」などのように，その動きを積極的にとらえていると考えられる意見であった。「体幹部が強調されている動き」に関する多くの意見がでた後に質問されたため，約87パーセントの児童が「体幹部が強調されている動き」の方がよい動きであると認識することができたのではないかと推察される。

3.2　提示用資料の観察による2つの動きの違いについての記述

2つの動きを観察した児童の記述内容を帰納的分類で分析した結果が表2である。

表2　2つの動きを観察した児童の記述内容　(　) 内は記述数

体の部位 (99)	背中 (28)		はっている
			せなかがまるい
			せすじがまがっている (2)
		背中の広がり (12)	くの字できれいにみえる
			くの字 (3)
			体がくの字に曲がっている
	おなか (1)		おなかが中心

	ひじ（2）		ひじの高さが高い（2）
	肩（1）		1とくらべて肩がおちている
	歩幅（3）		歩幅が大きい
			足のところが1と2ではちがった
	足（23）	ひざ（13）	ひざを深くまげている（6）
			足のふもとしかまがっていなくて体だけがぼうだちになっている
			ももものつけねをひいて「くの字」になっている
			足がくの字
			かなり深くまげている
	腰（10）		こしを低くする
			こしがおちる
	首（6）		首がでる（2）
			首も少し下へ
	頭（7）		頭の位置が低い（3）
			頭が大きくさがっている
	二部以上の部位(6)		体を伸ばしているときと縮ませているときとの変化を大きく
			見せたいと思ったら足もこしもまげないといけない
			腰が低くなって背中が曲がっている
	体全体（8）		じぐざぐになっている
			Zみたいな形
	不明（4）		ちぢんだりのびたりを繰り返している
			ちぢんだりのびたりがよくわかる
リズム（11）	タイミング（8）		タイミングがはやい
			下→上のタイミングがおそい
			リズムにのっているようにみえる
			ちょうどいい
動きとリズムの関係（3）			のびちぢみしていてリズムにのっている
			背中が「グニャッ」とまがっていてリズムにのっているかんじ
踊っている印象(9)			上半身も下半身も使っていて大きく表現できている
			はげしい

分析の結果，児童の記述は，「体の部位」「リズム」「動きとリズムの関係」「踊っている印象」の4つのカテゴリーに分類された。「体の部位」というカテゴリーには，「せなかがまがっている」「ひざ

を深く曲げている」などの体の部位がどうなっているのかを表わす記述が含まれていた。「リズム」というカテゴリーには,「タイミングがはやい」「上下がはやい」「ちょうどいい」など,動きが音にあっているかどうかに気付いていると考えられる記述が含まれていた。「動きとリズムの関係」というカテゴリーには,「背中が『グニャッ』とまがっていてリズムにのっているかんじ」「のびちぢみしていてリズムにのっている」など,体の動かし方とリズムを関連づけていると考えられる。堀田ら(2014)は,リズムダンスの教育内容を客観的に認識される時間的な内容である「外在的な曲やビート」[10],客観的に認識される空間的な内容である「ダンスの基本ステップや振りなどの動き」[11],主観的に認識する空間的な内容である「イメージ」,主観的に認識される時間的な内容として「内的な(自分たちの)リズム」[12]の4つの側面を表わしている。今回出現した「動きとリズムの関係」というカテゴリーは,「リズムにのっているかんじ」という時間的な要素である「外在的な曲やビート」[13]と「背中が『グニャッ』とまがっていて」という空間的な要素である「ダンスの基本ステップや振りなどの動き」[14]の2つの側面を見ることができていたと推察される。「踊っている印象」というカテゴリーには,「動きがはげしい」「なめらか」「全体的にしょぼい」など,体の部位など特定の箇所を見るのとは違い,動き全体を見ての気付きであると考えられる。

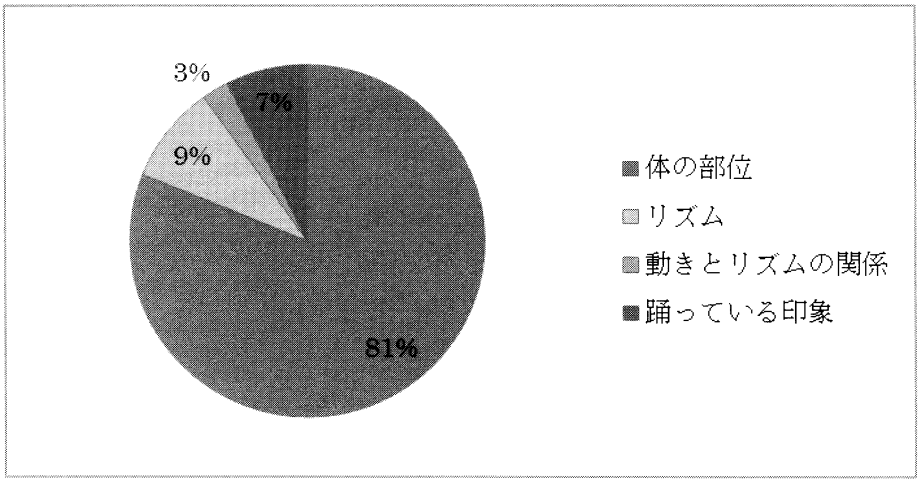

図2　2つのダウンの動きを見た児童の記述内容の割合

4つのカテゴリーの記述内容の割合は,図2の通りである。「体の部位」に関する記述数が一番多かった。「体の部位」のカテゴリーの中には,図3にあるように,背中,おなか,ひじ,肩,歩幅,足,腰,首,頭,体全体,二部以上の部位,不明(どこの部位かは不明であるが,体の部位に関する記述と考えられるもの)という12個の項目に分けられた。一番気付きが多かった項目は背中であり,28の記述があった。これは39名の児童のうち,28名の児童が気付いていることになる。背中が曲がっている動きを見て,「せなかがまがっている」というような動きの状態を書いている記述もあれば,「席に座った後の悪い人の感じ」というように動きを比喩表現している記述も見られた。児童は,「体幹部を強調していない動き」と「体幹部を強調している動き」という意図的な2つの上半身の動きを見て,背中の動きに着目しやすかったのではないかと考えられる。背中の気付きが一番多かったという結果から,児童らに体幹部の動きを引き出す際,背中の動かし方を意識させることが有効な指導になることが示唆された。

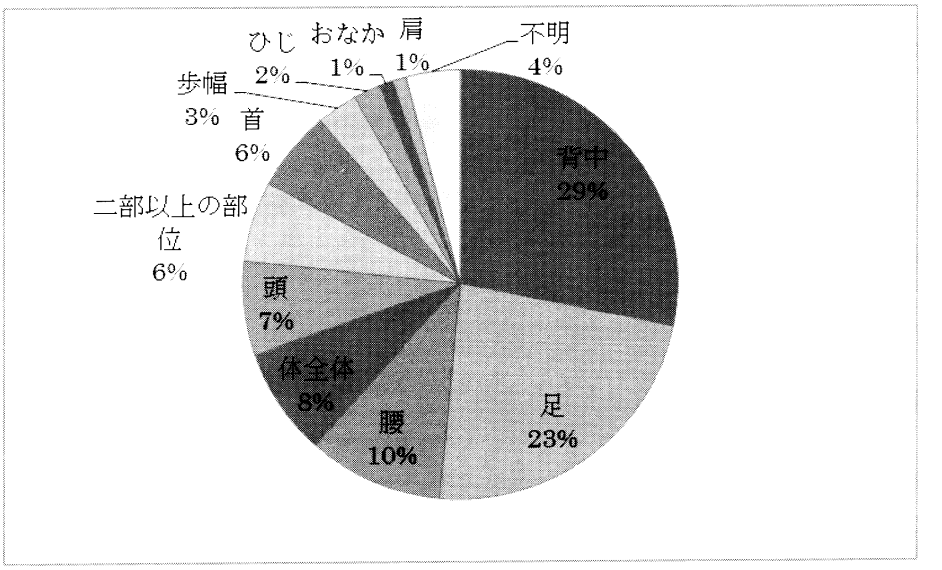

図 3 「体の部位」についての記述の割合

提示用資料を観察して，児童は動きの様子について，「まがっている」「のびている」というような状態を表わしている記述だけではなかった。例えば，図形表現，比喩を使った表現，オノマトペを使った表現が見られた（表 3)。上記の表の図形の例にある「体がくの字」は上半身を曲げた動きについての記述である。上半身の曲がりを「く」の文字で表わしている。また，「お人形さんみたい」というような比喩表現が見られた。これは，上半身を曲げない動きを，上半身をまっすぐにしているお人形と表現している。図形や比喩，オノマトペというような表現方法は，児童が体幹部をどう動かすのかを具体的にイメージさせるのに有効ではないかと推察された。

表 3　児童の記述表現例（一部抜粋）

表現方法	児童の記述例
図形	体がくの字，　Wがたがた
比喩	お人形さんみたい
オノマトペ	グニャッと曲がっていて，ピンッとなっていて

本研究の対象児童は，1 年前から今回の研究にあたるまで，2 回のリズムダンスの単元を行っていた。1 回目の単元では，ゲストティーチャーを招き，8 種類のヒップホップのステップを学習していた。それ以降の単元では，習得した 8 種類のステップを組み合わせて作品を作るなどの学習を行っていた。このような学習を経験したことによって,「体の部位」や「リズム」,「リズム動きの関係」,「踊っている印象」に着目することができるようになったと考えられる。これらの動きの気付きが，図形や比喩，オノマトペなどで動きを表現することにつながったのではないかと推察された。

4. 今後の課題

本研究はリズムダンスの学習経験が豊富である児童が対象であり，その学習経験と多様な気付きが

生まれたことには関係があったとも考えられる。今後は，リズムダンスの学習経験がない児童の動きへの気付きの検証もあわせて行う必要性があると思われる。また，本研究の対象学級での事前に行われた 2 回の単元の内容と記述内容の関係を検証することで，多様な気付きを生み出すために必要と考えられる指導を明らかにしていけるのではないかと考えられる。

引用文献及び参考文献

1） 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説体育編．東洋館出版社，pp.54-55.

2） 同上

3） 村田芳子（2002）最新 楽しいリズムダンス・現代的なリズムのダンス．小学館，p.9.

4） 同上

5） 同上

6） 同上

7） 古川康成（2011）進んでコミュニケーションを取り合おうとする児童の育成：『習慣 — 活用 — 探求』型学習スタイルを活用したリズムダンスの実践．教育実践研究，21，pp.179-184.

8） 原田奈名子，全国ダンス・表現運動授業研究会編（2011）明日からトライ！ダンスの授業．大修館書店，p.97.

9） 文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説体育編．東洋館出版社，pp.54-55.

10）堀田諭・酒本絵梨子・岡本和隆（2014）リズムを手がかりとした現代的なリズムのダンスの単元構成原理－客観から主観への認識論的転換と総合的な内容構成－．日本体育学会第 65 大会研究発表資料，p.7.

11）同上

12）同上

13）同上

14）同上